第　５８号

平成１９年１０月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

おかせ　ものち

高野山を開かれたお大師さまは六十二歳のとき、ご入定なさいました。お大師さまに限って、ご入定と申します。お大師さまはお亡くなりになったのではなく、今も生きて我々を見守ってくださっている、生きて我々を救ってくださっているという意味で、ご入定という言葉を使うのです。お大師さまはそのみ心を、高野山萬燈会の願文の中でこのように申されています。「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きなん」これは、この世がなくなってしまい、生きとし生ける者がすべていなくなってしまい、仏さまのいらっしやるお浄土もなくなってしまった時には私の願いも尽きてしまうだろうが、この世がある限り、生きとし生ける者がいる限り、私の願いは尽きることなく人々を守り、悩み苦しむ者を救い続けますという意味です。

世の中の災いを取り除き悩み苦しむ者を救い、この世を仏さまのお浄土とするため、お大師さまはその教えを求め中国へ渡られ、密教を学び、日本に戻って真言宗を開かれました。　真言宗の教えは、まず「即身成仏」、この身このままで仏さまになること。そして「済世利人」、悩み苦しむ者を救い人々に利益を施し、この世を救うこと。そして「密厳仏国の完成」、すべての人が仏さまになり、この世を仏さまのお浄土にすることです。そのためにお大師さまは日本全国を歩かれ、高野山を開き、讃岐の国、今の香川県には満濃池をつくり、四国には八十八ヵ所霊場を開き、京都にはどのような人でも入ることができ、学費も無料の学校、綜芸種智院をつくられました。

お大師さまご入定からハ十六年過ぎたある夜、醍醐天皇の夢枕に立たれ、「高野山　結ぶ庵に袖朽ちて苔の下にぞ有明の月」という歌を詠まれたそうです。これは、今も衣の袖がぼろぼろになるまで全国を歩き、月の光のように悩み苦しむ者を照らし救っています、という意味です。

天皇は非常に感激し、せめて衣だけでも新しいものを着ていただきたいと考え、衣と一緒に弘法大師という名前を贈ったのです。このとき衣を持ち、大師号の報告に高野山に登られた京都の東寺の住職でありました観賢僧正から「南無大師遍照金剛」の言葉が発せられて以来、私たち真言宗では南無大師遍照金剛をご宝号として唱えています。

「南無」は、自分が最も大切にしているこの命を三宝に捧げるということで、命がけで仏さまと、仏さまの教えと、その教えを実践する人々を信仰し、自分も少しでも仏さまに近づこうとする心を持つことです。

「大師」は、日本の仏教の歴史で、大師号を贈られた方は延べ二十四人います。一番目は天台宗を開かれた最澄さまが伝教大師を、そして最澄さまのお弟子さんの円仁さまが慈覚大師を、三人目に空海さまが弘法大師を贈られました。お大師さまと言えば弘法大師さまを言うようになりました。そこでご宝号の中に大師という二文字が入っています。

「遍照金剛」ですが、遍照とは、太陽がすべてのものを平等に照らすように、すべてのものを遍く照らす仏さまの大慈悲の心を表す言葉です。金剛は、私たちの煩悩を打ち破る仏さまの知恵を表し、仏さまの知恵は永遠に壊れることのない金剛石のごとくでありますので、金剛の二文字が使われています。永遠に変わることのない知恵の光を、慈悲の心ですべての者に平等に照らしているという意味です。

お大師さまが中国に渡り、密教を学ぶため師匠となる恵果和尚を訪ねたとき、和尚はお大師さまを一目見るなり「あなたが来るのを長いこと待っていた。今日、会えてたいへん嬉しい。私の命はもうすぐ尽きようとしている。あなたに密教のすべてを伝えたい」と言われ、お大師さまを弟子とされました。そして最後の灌頂という儀式のとき、曼荼羅の上に投げた花が大日如来の上に落ち、それを見た恵果和尚が「遍照金剛」の名を贈ったと言われています。

南無大師遍照金剛

仏教が生んだ日本語

往生　（おうじょう）

たちどまる／立往生／往生際／閉口／進退極まる。

この世を去って、あの世に生まれ変わることを指すが、間違っても人間死にぎわまで「往生際が悪い」と言われたくはなく、また野たれ死でなく、家族に看取られて、惜しい人が逝ったと言われる「大往生」をとげたいものである。

＝語　源＝

もともとは、あの世が地獄でも「往生」といわれていたが、浄土教が、一般に広まり始めて「往生」といえば、阿弥陀如来の極楽浄土をさすようになった。

空海の言葉　シリーズ

道を学んで利を謀（はか）らず

●● 学問は世の中の役に立つ人間になるためにするのであって、金儲けのためにするのではない

弘法さんは、一所懸命に勉強している一般の学生を見るにつけ、考えたのです。

〈こんなに勉強して卒業しても、全員の就職先は役所だ。ところが役人を見渡しても、みんな己れの地位や名誉を上げるために、日夜汲々としているではないか。

ようやく地位が上がっても、天皇が変われば、たちまちクビではないか。

人間がどんなに財産を積んでも、位がどんなに上がっても、どんな名誉に輝いても、どんな権力を手に入れても、死んでしまえばなにも残らないではないか。

こんなことのために学問をするのなら、ぼくは辞めだ。

独学でもいい、世の中のすべての人びとの幸せのために、大宇宙の法則である「道理」とやらを研究するぞ！〉

と、決心した弘法さんは、十九歳の若さで大学を中退し、そのまま近畿や四国の山中に分け入り、山嶽修行をしながら、ひたすら「人間の心」について深く探究することになるのです。　空海のことばより